第4章　μプラン実現に向けた商店街振興

1　はじめに　～不動通りの現況

徳丸不動通り商店街について、本分科会の首藤研究員の報告によれば、現在の不動通り商店街は、「自然発生的に生成・発展した商店街ではあるが、（中略）全体システムとして整備されていないため、現在ではほとんど商店街の体をなしていないように感じられる」とされている。しかし、「学生という十分吸収可能な潜在顧客を有している。」ため、商店街の「一般消費者と学生の両方が生活できるコミュニティ形成を念頭に置いた新しいタイプの再組織化を検討すべき」と述べている。

また、徳丸不動通り周辺の地域・社会資源については、本分科会の橋本委員の報告及び学生のいる町コンテストの大東文化大学学生の報告などによれば以下のようにまとめられる

①町会・自治会―徳丸協栄会、徳丸不動町会、徳丸親和会、徳丸第一町会、徳丸平和会、徳丸三交会（6町会）

②商店街―徳丸不動通り商店街、西徳商栄会（2商店街、45会員）

③商業関係―サティ、板橋のいっぴん（梅の郷里：あけぼの、アップルパイ：ガトーマスダ）、ニコニコ湯、北野湯、黄金湯、光徳湯

④地域資源―中尾不動尊、中尾観音堂、前谷津川緑道

⑤学校―大東文化大学、徳丸小学校、北野小学校、板橋有徳高校、まきば幼稚園、徳丸幼稚園、大東文化会館

⑥その他―老人クラブ等

不動通りの活性化にあたっては、これらの地域資源の活用を、まず考える必要がある。

2　板橋区の商店街振興施策

(1) 板橋区産業活性化基本条例

板橋区では平成17年に「板橋区産業活性化基本条例」を制定し、区内産業を取り巻く環境変化と課題に対応する、産業活性化の基本方針を定めた。

条例では、産業活性化の基本方針を、

(1) 事業者自らの創意工夫及び自律的な発展を促進すること。
(2) 生活及び産業が調和したまちづくりを推進すること。
(3) 地域資源を積極的に活用して新たな価値を創造すること。
(4) 事業者を中心に、区民及び区が一体となって産業の活性化に努めること。

と定めている。また、区の産業振興施策の中で、商業特に商店街については、「区民の交流の場として、地域コミュニティの中心的な役割を商店街が担うことができるまちづくりを進め、商店街の振興を図ること。」とされている。

さらに、産業振興施策の実施及び国都との連携や産業界との協働に努めるなどの区の責務を示すとともに、事業者の責務を以下のように定めている。

①事業者は、区民の良好な生活環境の維持に配慮し、事業の発展及び経営革新に努めるものとする。②事業者は、区、産業団体その他関係団体による区内産業振興のための施策に積極的に参加し、協力するよう努めるものとする。③商店街において小売店等を営む事業者は、商店街の振興を図るため、商店会への加入等に

より相互に協力するよう努めるものとする。④商店街において小売店等を営む事業者は、商店会が商店街の振興に関する事業を実施するときは、応分の負担等をすることにより、当該事業に協力するよう努めるものとする。

このように、商店街振興については、産業の発展や産業活性化にとどまらず、地域コミュニティの視点やまちの賑わい、さらにはまちの活力や活性化の視点から位置づけられている。また、事業者には、区や区民との協力協働に加え、事業者自らの経営努力、応分の負担のもとでの商店会への協力などの方向が示されている。

(2) 産業振興構想

板橋区産業活性化基本条例に基づき策定された、板橋区産業振興構想では、商店街振興は次のように示されている。

まず、板橋区産業の将来像を

夢に形を　産業文化都市　いたばし

と定め、将来像実現のために、①新産業の育成、②産業支援施策の強化、の２つの方策を掲げ、相互に関連をもたせ、産業活性化を促進するとされている。

新産業の育成については、これからの社会変化の中で成長が期待される分野や板橋区の基幹産業である光学や印刷分野など、板橋区の資源を効果的に活用できるテーマとして、①健康～高齢社会の生活スタイルを提案する産業～、②環境～持続可能な社会を形成する～、③光・色彩～進化する板橋の地域産業～、を設定した。

産業支援施策の強化のなかで商店街振興については、新産業の育成と同じテーマが設定され、「健康、環境、光・色彩」の商店

街活動により、消費者に支持される商店街を確立し、商店街活動の意欲向上、商店街の魅力づくりを推進するとされている。具体的には、①健康：農家との連携による地産地消、健康関連商品のアンテナショップ、健康チャレンジショップ、健康関係イベントの展開など、②環境：エコショップ活動、エコ商店街認定、環境関連イベントの実施など、③光・色彩：光景観商店街の認定、関連イベントの開催　が商店街、産業団体、地域住民、企業、学校、NPOなどとの協働のもとに推進することが示されている。

(3) 板橋区の具体的な商店街振興策

板橋区が行っている主な商店街振興支援の施策は以下のとおりである。

・にぎわいのあるまちづくり事業
商店街が地域の特性や消費者のニーズに対応して主体的の取り組むイベント事業や活性化事業への補助を行う。

・出前セミナーの実施とアドバイザーの派遣
商店街の研修や勉強会への講師の派遣や、商店街を活性化するためのプランニングを支援する。

・空き店舗ルネッサンス事業
商店街が空き店舗を活用して取り組む事業への家賃・施設整備補助事業

・区民が選ぶ板橋のいっぴん事業
区内で製造販売されている和菓子、洋菓子、パン、惣菜、酒などの食料品を区民が推薦したものを、おいしい、珍しい、こだわりがある、板橋らしいなどの視点から認定し、現在65品目が選定されている。

3　元気のある商店街活動の事例

区内では、様々な先駆的が行われているが、主な事例について以下報告する。

(1) 板橋縁宿（別紙資料参照）

(2) とれたて村（　〃　）

(3) 茶の間（　〃　）

(4) なかいた環創堂（　〃　）

(5) いたばし三大祭り

板橋区内の商店街では、商店街と地域が一体となって、数々のイベントを実施している。その中で、特に多くの人が集まり、また地域イベントとして定着しているのが、中板橋のへそまつり、成増阿波踊り、志村銀座のサンバカーニバルである。この3つのイベントを、板橋の三大祭りと称している。

4　μプラン実現に向けて

以上を踏まえ、プラン実現に向けた方策を検討するにあたって考慮すべき課題を以下整理したい。なお、不動通り活性化のための方策については、様々な方法が考えられるが、ここでは、不動通り、大学、周辺の地域、また、板橋区として実現の可能性のありそうな方策を前提に検討を行いたい。従って、ハード整備よりも、ソフト面での対応を中心にした検討を行っている。

(1) 地域資源の活用

不動通りの活性化にあたっては、地域資源の活用を、まず考える必要がある。

地域資源については、社会資源と人的資源に整理することができるが、社会資源の活用については、学生の街づくりコンテスト

などの検討成果に基づいて活用を図ることが望まれる。活用の対象として検討すべきものとして、特に「サティ」の集客力を提案したい。近年の商店街振興について考えるとき、郊外型大規模小売店舗の出店と中心市街地の商店街の衰退とが、日本全国いずれの地域の課題となっている。ここではそのことについて、詳細に検討することはできないが、東武練馬駅前の「サティ」の集客力を、この地区の資源のひとつと捉え、連携や活用が望まれるところである。

特に、土日の買い物客を不動通りに引き込むことができれば、不動通りの賑わいや活性化に大きく貢献するものと考える。社会貢献や地域の一員としての役割を果たすことも、企業の役割だと考えられるので、地域の一員として関わることを働きかけていくことも必要だと考える。

もう一方の、重要な社会資源は人的資源である。人的資源として考えられるものに、地域コミュニティや地域のネットワークがある。不動通りは徳丸地域として、町会自治会のコミュニティ組織や青少年健全育成活動を行うための人的ネットワークをもっているので積極的な連携が望まれる。

また、事業実施にあたっては大東文化大学学生が強力なマンパワーとして存在している。中板橋商店街における大東文化大学と商店街の連携事業「なかいた環創堂」では、学生の力が商店街のイベント事業に大きく貢献し、中板へそ祭り成功には学生のパワーが不可欠の状況になっている。なかいた環創堂などの事例をもとに、不動通りでのイベント実施時の大東文化大学学生のマンパワーの活用が図られることを望みたい。

(2) 様々な連携の可能性の模索

商店街の賑わいの創出や地域の活性化を考えるとき、もう一つ

の大きな課題が様々な機関や組織との連携である。前項で述べた、町会自治会や青少年健全育成活動との連携に加えて、その影響が大きなものとして、「子ども」、「中高年」、「高齢者」、「大学」などとの様々な連携が望まれる。

「子ども」についてであるが、商店街や地域でのイベントを実施する際、子どもの果たす役割はきわめて大きい。鼓笛隊や吹奏楽、マーチングバンドなどの音楽演奏、踊りやダンス、絵画、書道などの美術作品等を、区内の幼稚園、保育園、小学校、中学校では積極的に取り組んでいる。その発表の場がなかなか見出せない場合も多く、商店街のイベントや施設等で発表の場を提供できれば、子どもたちの健全育成だけでなく、出演する子どもの保護者、関係者の集客力は驚くほどである。

また、2007年問題と言われる、いわゆる団塊の世代の大量退職時代を迎え、「中高年」世代の生活や雇用、技術の継承に加えて、生きがい対策や社会参加も大きな課題となっている。この世代の中には、今まで企業の中だけで生きてきたので、これからは地域や社会の中で自分の経験や知識を生かしつつ、自分の好きな分野で社会に関わり、役立ちたいと願っている人も多い。これらの団塊の世代を中心とする人たちの、ボランティア的な関わりを組織化し、力を集めることができれば、地域の活性化につながっていくものと考える。不動通り活性化の取り組みには、イベント実施や組織運営面で、「中高年」の役割を位置づけ、積極的な協力を引き出していく必要がある。

さらに、「高齢者」との連携では、地域の老人クラブなどと、何が協力可能であるかを話し合い、一歩一歩連携を築きあげていくことが必要である。また、近年は、高齢者の生きがい対策として、絵手紙などのちょっとした作品づくりが注目されている。これらの作品を発表する場を、不動通りに設けていくことで、高齢

者の地域参加や生きがい対策に結びつくと考える。

(3) むすび

μプラン実現に向けた商店街振興として、不動通りを活性化するのは、現状から見ると困難な課題であり、一朝一夕に実現することは難しい状況である。しかし、他の商店街活性化の事例を見ても、条件に恵まれ何もしないで成功した事例はない。成功事例は何よりも、商店街とその周りの人々の熱意とやる気に支えられた不断の努力の賜物だと考える。

そう考えると、不動通りの活性化に向けた取り組みは、これから始まろうとしているのであり、単に商店街振興に留まらない「まちづくり」の課題であるといえるのではないだろうか。

そういった視点から、やはり原点に立ち返り、意欲と熱意を持って、地域資源を掘り起こし、また、それを磨き上げ、様々な人々との連携の下、粘り強い取り組みが求められるのではないだろうか。様々な行政からの支援があるが、特に地域資源の発掘や活性化のための仕掛け作りには、専門家の力を借りることも必要であるので、その部分での行政の支援をぜひ活用していただきたい。

これから、大東文化大学、地域の関係者、行政、協力可能な団体や個人の連携のための第一歩が求められていると考える。

資料１

「板橋縁宿事業」概要

１　事業目的

「旧板橋宿」の歴史遺産を活用し、商業、観光地としての「地域ブランド」を確立することで、商店街と地域の活性化を図る。

２　事業開始までの経緯

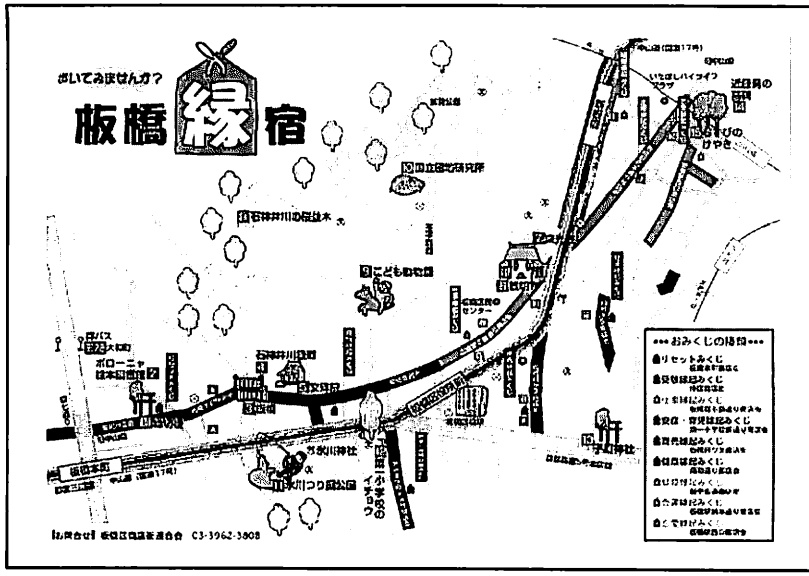
2002年に中山道開闢(かいびゃく)400年を迎えたのを期に、中山道「板橋宿」の歴史遺産を活用し、町おこしをしようという動きが、中山道沿いの商店街青年部を中心に生まれた。共同イベントを実施する中で、「板橋宿」を題材に、商店街と地域の活性化を図ろうという気運が高まり、平成15年度に１年間をかけて活性化の方針を固め、平成16年度、「板橋縁宿」事業を開始した。

３　参加商店街

JR板橋駅西口から板橋区の名前の由来となった「板橋」まで、９商店街が参加している。

板橋区商店街連合会第一支部（９商店街、会員数506店舗）

板橋宿不動通り商店街振興組合・仲宿商店街振興組合
板橋駅前本通り商店街振興組合・板橋四つ又商店街振興組合
板橋本町商店街振興組合・第一小学校前通り商店会
板橋駅西口商店会・新中山道商店街・商和通り商店会



4　事業内容

旧中山道の「縁切榎」と「結びの欅」まで、９商店街におみくじ処を設け、旧板橋宿を散策（回遊）できる仕掛け作り商店街振興を図っている。

【キャッチフレーズ】

○「縁切榎」でリセットして、「板橋」から始める８つの物語、「むすびのけやき」で開運祈願

【年度別実績】

平成15年度

○プロジェクト委員会発足（４月）

・９商店街の理事長、会長、青年部会員で構成）

○街づくりのコンサルティングを含め活性化プランを策定（５月～３月）

平成16年度

○事業を「板橋縁宿プロジェクト」と命名

○回遊性を高める仕掛けをつくる。

・縁切りリセットみくじ、開運縁起みくじ、（９種類×15項目のおみくじ）、板橋観光案内版の作成、板橋宿タウンガイドマップの作成、おみくじ装置

○オープニングイベント（17年３月12日）

平成17年度

○第１回東京商店街グランプリ（17年11月18日）にてグランプリを受賞

○区民文化栄誉賞　区民文化特別賞受賞（18年３月４日）

○事業のPR事業と宿場祭り（18年３月19日）を実施

平成18年度

○中山道宿場会議の開催（10月20日、21日）に合わせ、各商店街に縁宿提灯（200個）の装飾を行う。

○第３回板橋縁宿まつりの開催

・中山道宿場まつりとの共催で、10月21日に第3回板橋縁宿まつりとして中山道ウォーク・スタンプラリーを開催。参加者は約5,000人と当初の予想をはるかに上回る盛況ぶりで、開催当日は加盟店の売上が30～70％増加した。

5　成果、効果

○地域の物的、人的資源を活用して商業地「板橋宿」として、観光地としてのイメージアップに寄与した。商店街やの地域ブランド創出のきっかけづくりとなった。

○来街者が増加し、平成18年度は約5,000人がおみくじを購入した。

○東京商店街グランプリの受賞により、近隣自治体やマスコミから注目されるようになり、知名度がアップした。

資料２

交流都市アンテナショップ運営事業
全国ふる里ふれあいショップ「とれたて村」

１．とれたて村ってどんなお店？

板橋区の交流都市が集まった合同アンテナショップで、各地のおいしいもの、とっておきの情報を発信する拠点です。店内には、産直野菜をはじめ、このまちならではの商品が満載。全国様々なまちの商品、情報が手に入るのが特徴です。とれたて村があるのは、商店街。日常生活を支える商店街でお客様の生の声を聞き、消費地と生産地の息の長い交流事業に育てていきたいと交流都市に呼びかけ、17年10月、ハッピーロード大山商店街に開店しました。

２．ちょっと変わった運営方式

とれたて村の店舗経営は、商店街自らあたり、商品は買い取り方式。生産者のリスクも考慮し、配送コストもとれたて村が全額負担しています。産地側が売りたい商品をリストアップし、そのリストをもとに商品担当が実際に現地に出向いて吟味しています。各自治体と個別に取引することで、あまり知られていない各地のよい商品を発掘できるメリットがあります。

また、商品の売れ筋動向はもちろん、参加自治体側から新商品をモニタリングしてほしいという要望があれば、お客の声をレポートして自治体側にフィードバックするサービスもおこなっています。

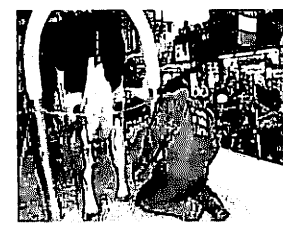
生産者からも、単なる物販ではなく、首都圏の消費者動向やニーズを把握できる場として広く活用できるとして喜んでいただいています。

3．ユニークなふる里イベントや交流事業が充実

とれたて村は単なる物販店ではないのが大きな特徴です。

そのひとつとして、各自治体が週末に入れ替わりでまちの宣伝にやってくる「ふる里イベント」は、来街者に大好評です。

物産展はもちろん、商店街の一角に足湯温泉が登場したり、乳牛を連れてきて乳搾りの体験をさせたりと、「販売」にこだわらない「そのまちのPRイベント」で商店街とその商圏に話題を提供しています。



また区民が産地を訪れる「交流体験バスツアー」もスタートし、都会と農山漁村がふれあう場となっています。とれたて村は区と農山漁村を結ぶ交流拠点として、様々な交流事業を行っています。

4．点から線、線から面への展開に

この交流都市アンテナショップ運営事業は、「商店街振興」と「都市交流促進」大きく２つの目的で支援しています。

とれたて村は、商店街が運営をすることで、単なる物販店にとどまらず、販促事業やイベント事業と連携させ、商店街全体の集客効果を上げています。ハッピーロード大山商店街でのイベントは年間30回を超え、とれたて村開設前に比べ１日の通行量は約3,000人も増加しています。とれたて村が核となり、「ハッピーロードに行けばいつも何か新しいことをやっている」という新たな魅力の付加、来街動機づけにつながっています。

また、この取組みを受け、18年９月、上板南口銀座商店街に2店舗目となる「上板橋とれたて村」がオープンしました。同商店街では30年続く恒例の朝市の人出がかなり減少していることに危惧していましたが、とれたて村開設後、参加自治体と連携して朝市でイベントを開催するようになり、朝市には驚くほど買い物客が増え、商店街の活性化につながってきています。

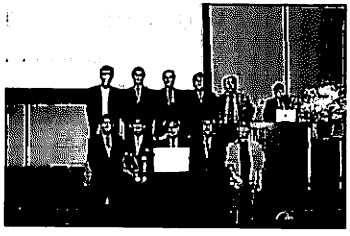
このほか他の商店街のイベントにおいても、とれたて村に参加している自治体の物産展を開催するなど、広域的な広がりができています。

このように、とれたて村は個店としての集客から商店街全体の集客に、さらに１商店街の枠を超えた他の商店街への波及、つまり点から線、線から面への展開につながっています。

５．第２回東京商店街グランプリ受賞

18年11月に開催された第２回東京商店街グランプリ「活性化事業部門」で、ハッピーロード大山商店街振興組合のとれたて村運営事業がグランプリを受賞しました。これは第１回の板橋縁宿事業の受賞に続き２年連続の快挙となります。東京都から「個性的なイベントの実施や近隣商店街への波及効果など空き店舗活用事業の枠を超え、商店街全体の集客効果をあげた新たな成功モデルとしてグランプリにふさわしい」と高い評価を受けました。

また、18年５月には経済産業省主催の「全国がんばる商店街77選」に選定され、12月には農林水産省の外郭団体である、財）食品流通構造改善促進機構主催の優良経営食料品小売店等全国コンクールにおいて第30回記念特別賞を受賞するなど、さまざまな観点で評価されました。



※平成19年度地域づくり表彰で国土交通大臣賞と日本政策投資銀行総裁賞を受賞しました。

6．店舗DATA（平成19年10月現在）

【ハッピーロード大山商店街】

◉所在地　〒173-0023
東京都板橋区大山町27-9
TEL. 03(3958)9040

◉営業時間
10:00～19:00（無休）

◉出店自治体
11市町村（最上町・尾花沢市
妙高市川口町・鴨川市
八丈町・長崎市・青森市
萩市・稚内市・小樽市）

【上板南口銀座商店街】

◉所在地　〒174-0076
東京都板橋区上板橋2-30-2
TEL.03(3559)1786

◉営業時間
10:00～20:00（無休）

◉出店自治体
8市町村（奥尻町・長井市
八丈町・みなかみ町・焼津市
駒ヶ根市・本宮市）

資料３

遊座大山商店街と東京家政大学との連携事業
インターハートTokyo-Kasei『茶の間』
～「食」を通じたコミュニティづくりの拠点～

◇目的・趣旨

遊座大山商店街と東京家政大学が連携し、新たな視点に立った商店街の振興を図る。

高齢者や単身者の個（孤）食、栄養バランスの偏りと健康の問題など、食環境をめぐる様々な課題がある中、身近で気軽に立ち寄ることができる商店街に「食」を通じたコミュニティづくりの拠点をつくることは、地域の課題解決につながるものである。
東京家政大学は、地域の一員として地域課題の解決に取り組み、社会に貢献することも大学の役割であるという認識のもと、遊座大山商店街で®コミュニティ・レストランを開設した。

◇所在地：板橋区大山東町４４－２　TEL. 6323－5553
◇店　名：インターハートTokyo-Kasei「茶の間－CHANOMA－」
◇営業日：月・火・木・金・土
11：30～15：00〔ランチ〕
17：30～21：00〔ディナー〕
※ 水・日をイベント開催日および定休日とする。

◇経　緯

東京家政大学のヒューマンライフ支援センターでは、学部の枠を超えて学生がやりたいことを形にするためのノウハウを学ぶ「企画の教室」を実施している。平成17年６月から実施しているプログラムに参加している学生が、ワークショップを積み重ねる中で、大学の衣食住に関する専門性を生かし、商店街に食を核としたコミュニティの拠点をつくることを企画し、その実現に向け

準備してきた。場所については、複数の商店街を調査し、遊座大山商店街で実施することを決定した。オープンは平成18年9月23日(土)。

※ヒューマンライフ支援センター…地域の方々と学生、教員、卒業生など異世代間の交流を通した多様な体験学習の場で、大学と地域を結ぶ窓口となっている。

◇営業の形態

メインスタッフ…大学の嘱託職員2名(大学を19年3月に卒業)

ボランティアスタッフ…学生に呼びかけ、現在100名以上が登録。メニュー開発、調理、接客、内装・インテリアづくり、ニュースレターづくり、ヘルシーメニュープロジェクト、食育プロジェクトなど、学生各自がそれぞれの持つ力を発揮しながら、店舗づくりに活かしている。

◇内　容

商店街と大学が協働し社会資源を活かしながら、「食」を核としたコミュニティづくり・課題解決型のレストランを拠点とした事業を展開する。

① レストラン事業

下記の点に留意し取り組んでいる。

【健康づくりを応援】学生による健康メニューの開発ほか

【地域の食卓・居間】だれもが安心して利用できるコミュニティスペース

【循環型社会づくり】食材、水などを無駄にせず環境に配慮した調理のプロセスの実践

【地産地消】環境負荷の少ない食材ルートの確保ほか

※野菜は主にハッピーロード大山商店街の「とれたて村」で、交流都市の野菜、板橋産の野菜を購入＝「板橋小鉢」

メニューコンセプト

◆エコ（安価・環境負荷が少ない・旬）

◆ヘルシー（バランスがよい・カラダにきく・ベジタブル）

◆ビューティー（彩りきれい・ダイエット効果・美肌効果）

◆ジャパニーズ（日本の食文化・米を中心に・おふくろの味）

②イベント・講座・相談事業

レストランを営業しない曜日に、ヒューマンライフ支援センター、臨床相談センター、生涯学習センターなど大学機関を活用し、地域や商店街のニーズに合った事業を実施する。

【子育て】絵本の読み聞かせ、育児相談、食育おもちゃづくり

【高齢者向け】高齢者向け楽しい体操、高齢者ふれあい食事会

【健　康】ヘルシーお菓子づくり教室、健康相談、栄養相談、体組成測定、骨密度測定

【その他】学生の作品アート展、おいしいお茶（紅茶／中国茶）の入れ方講座など

③「食」の情報の提供、店舗の健康メニューの開発

遊座大山商店街は、「誰もが安心して利用できる（＝ユニバーサル）商店街」を宣言し、その取り組みの１つとして「利用者が安心して選べる『食』の情報・サービスの提供」を掲げている。「茶の間」はその拠点として栄養バランスやカロリーなどの情報を消費者に提供し、ノウハウを商店街全体の飲食店や食料品店へ広げている。

商店街のモデル店舗と栄養学部の学生が共同で開発した健康メニューレシピ「かぶらおろしそば」「旬菜雑穀セット」「ゆかり酒まんじゅう」は店舗の人気商品となっており、今後参加店を拡大する予定。

④その他

・商店街のイベントや店舗のPOP、包装紙、エコバッグ等の

デザインのアイデアを学生から募集し作成している。

・東京家政大学オリジナルグッズ（食育おもちゃ、ベビー服、絵本など）の展示・販売。

・ボローニャ子ども絵本館の絵本の展示。

◇事業の効果

商店街側は、栄養士等を目指す学生から専門的な知識を得ることができ、またこれまでの商店街事業が学生ならではの新しい発想や行動力により活性化されている。学生にとっても、自らの専門性を社会に貢献でき、価格設定等、経済について実社会での体験学習をする良い機会となっている。

また、「ユニバーサル商店街」としての取り組みを「茶の間」で実践し、他店舗へ広げることで、商店街としてのビジョンが明確化され、商店街全体の意識の向上につながっている。また、「茶の間」で行われる講座やイベントが新規来街者の増加につながっている。

◇第3回東京商店街グランプリ受賞

平成19年11月の第3回東京商店街グランプリ「活性化事業部門」で準グランプリを受賞しました。これはユニバーサル商店街の実践、健康、エコ、食育についての商店街と大学の連携、新規顧客の発掘などが評価されたものです。

資料４

なかいた環創堂

１．概　要

なかいた環創堂は、板橋区と大東文化大学、中板橋商店街の連携事業として平成17年７月から実施されている事業である。商店街が空き店舗を大東文化大学環境創造学部に貸し出し、大学が商店街の調査・研究・活動拠点とし、地域住民が気軽に交流できる新しい空間を作り出すことを目指している。

２．目　的

大東文化大学環境創造学部の理念は「地域に対して開かれた学部」であり、環創堂は、この理念に基づき、中板橋商店街の空き店舗を活用しながら、同商店街の活性化を図ることを目的に学生の活動拠点として設置された。主に大東文化大学環境創造学部の学生がメンバーとなり、学生のフィールドワークの場でとなっている。これは、学生にとって広義の「インターンシップ」、「ボランティア」の体験であり、教育・研究面ではもちろん、人格形成面でも期待している。教員にとっても、教育のみならず研究の領域でも成果を期待されている。

また、商店街としては、商店街の現場で学び、学生に地域貢献活動に参加してもらうことで、将来の“まちづくり”を担う人材を育成しようというねらいがある。

さらに、板橋区としては、商店街を取り巻く環境は厳しいので、にぎわいの創出を商店街だけで担うには限界があるとの認識があり、新たな視点で商店街事業を展開する必要があると考えているので、中板橋商店街と大東文化大学との連携事業として実施している。

3．活動状況

・空き店舗活用事務所「なかいた環創堂」設置・開所式
（平成17年７月16日）
・へそ踊りへの参加商店街マップづくり（アンケート調査）
・なかいた縁日への参加
・クリーン大作戦の実施
・地元小学生との懇親スポーツ大会の実施
・他の商店街の縁日への出店
・携帯用ホームページの立ち上げ
・商店街ウィンターセール「サンタトナカイタ」（学生によるネーミング）の実施
・PC用ホームページ（ブログ含む）の立ち上げ
・さくら祭り、へそ祭りへの参加
・沖縄からインターネット遠隔ライブ
板橋区の商店街をりんけんバンド（沖縄）が応援
・ペットボトルキャップリサイクルキャップ回収。

今後、なかいた環創堂は、単に商品やサービスを売買する既存の店舗としての活用よりも、地域のコミュニケーションの場、話題性に富んだユニークな情報の発信源という新たな店舗の活用と環境商店街の創造を目指して活動をしていく。